Japan Society of Obstetrics and Gynecology

5-25　婦人科悪性腫瘍の肝転移・再発に対する動注化学療法の検討

兵庫医大
鍔本浩志，森　龍雄，安達　進，小笠原利忠，香山浩二

【目的】婦人科腫瘍における肝転移・再発に対して肝動注療法を行いその効果と副作用について検討した．【方法】子宮癌・卵巣癌で初回治療後肝転移・再発を認めたものの内，肝機能障害を認めず，文書による同意を得られた4例を対象とした．右大腿動脈より留置カテーテルを挿入し，その先端は総肝動脈に留置し，薬剤はADR 20mg/^{2}単独，CDDP20mg/^{2}単独，又は5FU 250mg＋CDDP10mgを使用した．何れも間欠投与を4～13回行い，効果判定は造影CTを用い日本癌治療学会の効果判定基準により検討した．又腫瘍マーカーの推移を経時的に行った．【成績】症例は卵巣癌2例，子宮頚癌1例，子宮体癌1例で，縮小効果はPR2例，NC2例であった．腫瘍マーカーはNC症例に上昇を認めたが，PR症例では著明に低下した．副作用は何れもGrade1以下の骨髄毒性を認めるのみであったが，CDDP単独症例にアナフィラキシー症状を呈した．【結論】初回治療後難治性の肝転移・再発を来たした4例に肝動注療法を行い50%の奏効率を認めた．又CDDPの連続投与によるアナフィラキシーに対し副腎皮質ステロイド剤の前投与は効果があり継続投与可能であった．肝転移再発症例に対する肝動注療法は副作用も少なく有効な治療法であった．

5-26　婦人科動脈注入化学療法における塞栓術～塞栓物質の比較を中心に～

市立岸和田市民病院
濱田啓義，堀内由佳，森田康史，立山一郎

【目的】当院では以前より婦人科悪性腫瘍に対する動脈注入化学療法（以下動注と称す）を積極的に行っており，良好な成績を修めている．動注では，抗癌剤の選択，腫瘍栄養血管の同定・選択に加え，動脈塞栓術の及ぼす影響は大きい．
婦人科悪性腫瘍での動注では腫瘍栄養血管が多彩，2-3コース行われることが多い等の特徴があり，実際どの血管に何を塞栓するかの選択は多岐にわたる．
今回，当院で我々が行っている塞栓術の実際について症例をもとに報告する．
【症例】症例1は53歳女性，子宮頚癌IIIb期．初回の動注時に両側子宮動脈（UA）に薬剤を投与し微小デンプン球（DSM）での塞栓術を実施．2回目，両側UAともに再疎通．薬剤を投与後，右UAはゲルフォームで左UAはDSMで塞栓した．3回目，右UAを認めず，左UAおよび右内腸骨動脈臓側枝より薬剤を投与，左UAをゲルフォームで塞栓した．その後手術を行った．
症例2は62歳女性，卵巣癌IVa期．腫瘍はdouglas窩に存在．初回動注時，IMA領域に腫瘍濃染像を認めた．卵巣動脈（OvA），UA, IMAより薬剤を投与，OvAはゲルフォームにて塞栓した．2回目以降，OvAは認められず，2回目では右UAをゼルフォーム，左UAをDSMで塞栓．3回目では右UAは認められず，左UAをDSMで塞栓．4回目（最終回）に左UAをゼルフォームで塞栓した．4回ともIMAに対して薬剤を投与したが塞栓は行わなかった．その後，手術を施行した．
【結語】婦人科悪性腫瘍に対する動脈注入化学療法での塞栓術の意義は，大別すると（1）阻血効果による抗腫瘍効果，（2）標的組織での抗癌剤クリアランスの低下，（3）手術操作のサポートになる．当院では，以上の点を考慮した上で塞栓術の実施をしており，その一例を報告した．

5-27　婦人科悪性腫瘍に対するTJ療法の治療効果の検討

国立福山病院
早瀬良二，早田　桂，澤井秀秋，山本　暖

【目的】婦人科悪性腫瘍（卵巣癌，子宮体癌，子宮頚癌）に対するTJ（paclitaxel＋carboplatin）療法の治療効果を検討する．
【方法】卵巣癌の化学療法については既に大規模なstudyでCP（cyclophosphamide＋cisplatin）よりTJが優位との報告がある．われわれの施設では卵巣癌の化学療法を1998年よりCAP（CP＋adriamycin）よりTJに変更した．1989～1997年に治療した66例（CAP療法を主として使用した群）の上皮性卵巣癌と，1998～2002年までの41例（TJ療法を主として使用した群）の予後をKaplan-Meier法で検討してみた．子宮体癌，子宮頚癌については主として標的病変を有する症例について治療効果をRECIST（Response Evaluation Criteria in Solid Tumors）で検討した．【成績】卵巣癌ではCAP群（3期20例）の4年，5年予後は32%，16%で，TJ群（3期17例）では41.2%，27.5%であった．症例数も少なく明らかに予後が改善したとはいえない結果であった．子宮体癌（進行および再発）9例での奏効率は55.6%（5/9），再発子宮頚癌では50%（3/6）であった．頚癌再発の奏効例はすべて扁平上皮癌で，3例中2例が肺転移の標的病変を有していた．【結論】TJ療法は既に卵巣癌では標準治療となっているが，体癌，頚癌にも有効性が期待されさらに検討する必要がある

NII-Electronic Library Service